

令和3年度 第1回「放課後事業推進委員会」議事録

- 1 開催日時 令和3年10月18日(月) 10:00~12:00
- 2 開催場所 アクロス福岡 607 会議室
- 3 出席者
山下委員長、井上副委員長、浦川委員、岡委員、奥田委員、古賀委員、山浦委員
事務局(部長1名、課長1名、係長2名、係員1名、青少年育成コーディネーター6名)
- 4 議事
 - (1) 報告 実施状況について
 - (2) 議題
 - ・コロナ禍における子どもの状況及びわいわい広場の意義
 - ・わいわい広場の今後について(持続可能な運営を目指して)
 - (3) その他

【委員会資料】

- 資料1 : わいわい広場の実施状況
- 資料2 : わいわい広場開設状況(令和3年9月現在)
- 資料3 : わいわい広場統計データ
- 資料4 : 児童の事故・ケガ等のまとめ
- 資料5 : わいわい広場と留守家庭子ども会との連携について
- 資料6 : 研修実施状況
- 資料7 : わいわい広場の広報・普及啓発
- 資料8 : 派遣型わいわい広場

【参考資料】

- (参考資料1) 放課後事業推進委員会設置要綱
- (参考資料2) 放課後事業推進委員会委員名簿
- (参考資料3) 放課後事業推進委員会傍聴要領

5 議事概要

(事務局)

実施状況について、資料1～8により報告

(委員長)

ここからは報告事項についてのご意見やご感想、ご質問などをいただきたい。わいわい広場のこれまでの実施状況について資料に基づいて補足すると、資料1は緊急事態宣言等コロナ禍の状況に合わせてなんとかわいわい広場を実施できないか模索していることが伺える。資料2を見ると、現在138か所まで常設実施している校区が増えており、事業開始当初は10か所ぐらいしかなかったが、全て同じ形ではなく、離島への派遣など、地域の状況を踏まえてやり方を検討し、全校区で実施できるまでに増えた背景がある。資料3のわいわい広場の統計データは、必ずしも100%という数字を目指すことが目的ではなく、子ども達が主体的に遊べる場の1つとしてわいわい広場があるといいという捉え方で、コロナ禍の影響がありながらも遊び場の必要性が見えてくるデータだと思う。資料4の事故やケガについて、ケガをゼロにすることを目指すということではなく、子どもたちが豊かに遊ぶことを中心に考えたときに、「ケガが起きるから全部させない」では、やっている意味がなくなるが、だからといって、「ケガをどんどんさせればいい」ということでもない。さじ加減が重要になってくると思う。資料5は留守家庭子ども会との連携状況に関する内容で、コロナ禍で、外から見ても留守家庭子ども会の運営は大変だったと感じているが、その中で試行錯誤を重ねながら連携した状況が見えてくるデータだと思う。

(委員)

子どもたちが、遊びを通して折り合いをつけることを学んだり、同じ学級ではない異学年の子どもと遊んだりすることはとても大事だと思っている。

以前は、途中で雨が降るとわいわい広場は中止になり、わいわい広場に参加する予定にしていた児童は家に帰らないといけないが、そうなる働いている保護者からはわいわい広場に参加させられないという意見が挙がってきていた。その頃からすると留守家庭子ども会とも連携が進み、わいわい広場の実施手法も状況に合わせて柔軟になってきて、前任校では屋内でも実施することで雨の日も開催できるようになったという経緯がある。保護者の働き方や家庭の状況、校区の広さ、遊び場の数など、学校によって状況は違うので、他の学校と同じようにはなく、学校の状況に応じた柔軟な考え方をもって実施することが今後も必要ではないかと思う。

(委員長)

数が増えてきたからこそ、校区の状況とすり合わせを行い、柔軟な対応が必要ということはその通りだと思う。そこができないと現場が苦しみ、子どもが苦しむことにもつながってくるので、だからこそ各校区の事情をご存じである校長先生やPTAの方の視点が大事になってくると思う。

(委員)

コロナになって、公園で子どもたちが遊んでいる姿を見ると、いつも以上に尊く見え、遊べてよかったな、という思いで見ると、社会的には子どもたちが遊んでいると苦情を言う大人がおり、子どもが遊ぶこと一つにしても様々な圧力があつたのではないかと思う。わいわい広場は大丈夫だったのか、例えば、マスクを外して遊んでよいと言っても、それを見た地域の方がそれはいいのかと疑問を抱くといった、摩擦や苦勞があれば伺いたい。

(事務局)

コロナが長期化している中、わいわい広場の実施にあたり、マスクを外しての活動や遊具の使用は大丈夫なのかという意見がある一方で、もっと遊ばせていいのではないかと、どうしてマスクをつけて遊ばせているのかななどの意見もある。子どもたちのためになんとか感染リスクを抑えながらわいわい広場を実施することができないか、感染状況をふまえて検討を続けてきた。今年の5、6月の緊急事態宣言の時は、中止をせずに児童数を減らした分散開催などの対応により感染リスクを減らしながら実施した。夏休み明けも、なんとか実施したかったが、デルタ株の影響で中止せざるを得ない状況であった。ここ1年半はコロナ禍において、感染状況等のバランスを見ながら、いかに子どもたちの遊ぶ場所を確保するかということに苦慮した。

(委員)

様々な現場に行き、わいわい先生に保護者などからの声を尋ねるが、極端な意見は意外に少ない。わいわい広場では保護者に毎月わいわいだよりを発信しており、その中で普段から遊ぶことの大切さを発信していることもあり、こういう時期でも遊ぶことが大切であるということが浸透しているのかもしれない。例えばわいわい広場に参加することで家に帰ったらすぐ寝た、ゲームをしなかったなどリアルな好意的な反応が保護者からはある。

(委員)

公園でも、遊べる所と少し危ないところがあるような状況において、わいわい広場が開催され、遊び場の確保がされることで子どもたちが放課後に遊べる状況が親としては非常にありがたかった。昨年コロナが流行り出し、なかなかわいわい広場が開催できない状況になった。わいわい先生達も非常に悩み、親も迷っていたのが昨年の状況だと思う。どの

程度遊ばせていいのか、どの程度距離を保って遊ばせればいいのか、子どもたちと関わる中では非常に苦慮したのではないか。

コロナ禍で様々な意見がある中、感染対策をしながらも、走り回って遊ぶということが醍醐味とは思いますが、緊急事態宣言や感染者が拡大している中では、遊びのやり方を密にならないように工夫するなどして、少しでも開催できる方向に持って行ければいいなと親としては感じている。

(委員長)

単純に開催するかしないかだけではなくバランスや柔軟性を考慮しうまくやっていくことが大事だと思う。

(委員)

昨年度休校が明けて学校が始まった時、今まで外で遊んでいなかった子どもたちが昼休みに遊ぶようになった。子ども達は思いっきり体を動かす、友達と自由に遊ぶ、自分がやりたいことを見つけて遊ぶということが遊びの醍醐味だと思う。それと合わせて考えたとき、わいわい広場という遊び場があることは非常に意義のあることだと改めて思った。

1つは、コロナ禍で安心して遊ぶという観点では感染対策が大事になってくると思うが、きちんと対策された中で、外で思いっきり遊ぶ場があるということは、子どもたちにとって非常に大切なことだと改めて思った。わいわい先生方には子ども達に非常にきめ細かい支援をしていただきありがたいと思った。

もう1点は、安心安全の観点から見て、ケガが増えているという報告があり、子どもたちの今の状況を把握しながら、遊びとケガをさせないことのバランスを取ることが現場の悩みになってくるのではないか。こうした方がいいということはないが、そういう状況をわいわい先生、留守家庭子ども会、そして学校で共有して遊びについて考えていくことが必要だと感じた。

(委員長)

わいわい広場の意義を確認していただいたと思う。その上で安心感を持って開催するためにコロナ対策やケガの問題を考えたとき、自粛によって歩く歩数が減ったり、マスクによって表情が読みにくくなったりするなど、子どもたちの様子が変わってきたことを踏まえたリスクマネジメントに関する研修等が必要になってくると思った。

(委員長)

次に、議題について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

最初の議題は、「コロナ禍における子どもの状況及びわいわい広場の意義」についてとしている。

わいわい広場は、新型コロナウイルス感染症の影響により、昨年から今年にかけて、中止や児童数を減らす分散での開催など、通常開催が困難な時期が生じ、連続性を持って積み重ねてきた事業の流れがたびたび止まる、という状況が起きている。

昨年度の推進委員会においてもコロナの影響についてお話しいただいたが、昨年度はまだコロナがはじまったばかりの状況であった。本日もコロナ禍での子どもたちの遊びや過ごし方の変化をそれぞれの立場から話していただいていると思うが、コロナの影響が長期化した中での変化等を共有していければと思っている。また感染拡大における行動制限の中でも子どもたちの遊びの重要性は普遍的なことだと捉えており、長期化している状況だからこそ、わいわい広場を意義のあるものにしていきたいと思っているので、今一度、現在の子どもの状況や遊びの重要性等について、みなさんのご意見をいただき、理解を深め、今後さらに現場を充実させていきたいと考えている。

(委員)

子どもだけの問題ではなく、学校や保護者、地域の理解などが、遊び場づくりに大変影響するという意見が出たが、感染リスクと子どもが遊ぶことによる恩恵をどう考えていくのが重要な部分だと思う。体を動かさなければ体は成長しない、人と接しないとコミュニケーションは取れない。例えばコロナ禍で鬱になる子どもが非常に増えており、小学生や大学生の自殺率が昨年の2倍になっているという話もある。体を使わないから使い方もわからない。その結果、ケガが増えたという事実は学校現場の中でもあったのではないかなと思う。遊ぶことのメリットとデメリットがある中で、ケガに対する捉え方は今からの時代を生きる上でとても重要な視点になってくるのではないかな。だからこそ遊び場、そして遊ぶということに対して真剣に考えていく、そういう視点で議論していければ良いと考えている。

(委員)

学校もケガの種類や状況などの報告を受け、生徒指導で考えることもあるが、小さな段差につまずいたり、それで頭を打ったり、歯を打ったりしている。ケガをするかもしれないと事前に想像して行動する力が段々と薄まってきていると感じている。加えて何かにつかかっても手を出して大事な所を守るといような巧みな動きが苦手な子どもが多くなってきているとも感じている。それはやはり遊びの中で学ぶことが少なく、家庭の中でも危ないものを全て排除して、危なくないように子どもを育てているというものもある。昔は危ないことも多少はあってもケガをしながら遊び育っていったということもあり、そういったところで子どもが遊ばないことによるマイナスな面もあるのではないかなと思う。

(委員)

コロナだからというわけではなく、そういう子どもたちの育ちになってきているのだと思う。今こそ見方・考え方も大人が考えていかなければならない時期なのではないか。そのきっかけとなるのが子どもたちにどんな遊び場を提供するのかという場づくりである。そのなかでも体を動かす過程で擦り傷ができるということは当然あるわけで、そこをどういう風に見守るか、手当てをどうするかということをしかりと大人が考えていく必要があるのではないか。

(委員長)

コロナの影響に限らず、そもそも子どもたちの遊ぶ力や遊ぶことは大切であるという意見をいただいた。ではどういう遊び場を作っていくのかということについて、次の議題の中で話していきたい。事務局から次の議題の説明をお願いします。

(事務局)

次の議題は、「わいわい広場の今後について、持続可能な運営を目指して」ということで、わいわい広場は事業開始から15年以上が経過しており、現在、138校まで常設で実施する校区を広げてきた。わいわい広場の運営については、地域主体での運営はなかなか地域の負担も大きいことから、地域型は2校にとどまっており、136校については、地域から助言をいただきながら運営していくための「運営協議会」という組織を据えた上で、民間事業者への委託という形で運営している状況である。わいわい広場の実施については、受託事業者が現場責任者として配置しているわいわい先生が中心となって実施しており、地域の方に補助員として子どもたちの見守りにご協力いただいている。また、見守りサポーターとして、保護者の方に、時間が許す時に、童心に戻って、子どもたちと一緒に遊んでいただくなどして参画していただいている。加えて、子どもたちの遊び心を刺激するなど、遊びの専門家としてプレイワーカーを月に数回、派遣している。

わいわい広場は、子どもの遊びを通して、子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人が自然と交流することができる貴重な環境だと捉えており、質を維持・向上しながら持続可能に運営していくためには、人材の確保や育成、中でも広場開催の核となるわいわい先生の支援は特に重要と考えている。長く運営していくにあたり、当然、わいわい先生の世代交代はあるが、コロナの影響もあり、更に人材が交代する事例が増え、広場の今後の継続的な運営にあたり、わいわい先生の支援は重要な課題となっている。

市として、わいわい先生の支援を行っていくことが課題と考えている。現在も、受託事業者や青少年育成コーディネーターによりわいわい先生を支援しているが、それに加えて、同じように現場で活動するわいわい先生が現場感を持った支援を行うことで、支援の強化、持続可能な事業を運営するための人材の育成になるのではないかと考えている。

(委員長)

わいわい広場の数が増えてきたことは良いことだが、質が落ちていく可能性もある。特にわいわい先生の入れ替わりが起きてくると、長年わいわい先生をしていた方が急に辞めることで遊び場自体の雰囲気が変わってしまったり、子どもたちが主体的に遊べなくなったりすることが懸念される。実際に起きているケースもあるのではないか。それに加え、苦情などのダイレクトな意見を最初にわいわい先生が受けるなど、負担がかかっている部分があると思う。受託事業者や青少年育成コーディネーターがフォローをしていると思うが、受託事業者によって対応に違いはあり、市全体としてどういう方向を向いていくのか、わいわい広場はどう目指すべきか、サポートするチームのようなものを作り、確認していければよいのではないかと思う。

ここ数年はわいわい広場の数を増やすことが大きな目標だったと思うが、増えてきたからこそ質を高めながら維持をしていくことが大事ではないかと思っている。どうすべきなのかという答えはなかなか出てこないとは思いますが、ここでは答えを出すような議論ではなく、具体案に限らずわいわい広場の質を落とさず、むしろ質を高めていくために、自由にご意見頂ければと思う。

(委員)

私自身関心を持っているのはわいわい先生の質の問題である。レベルアップがない、あるいは理念の共有がないとわいわい広場はわいわい広場でなくなってしまうわけであり、ましてや人材の確保や継続が難しい状態があるとするとなおさらだと思った。受託事業者の考え方が1つのポイントかと思う。受託事業者によって、わいわい先生の支援方法も異なり、個性がある。そのような状況において、どうすればスムーズにサポートチームによる取り組みを行うことができるのか、もう少し知恵が必要なのではないか。市が一括でわいわい先生を雇用しているのであれば簡単な話なのかもしれないが、複数の受託事業者が間に関与しているので、それをどう考えたらよいのか、委員の方から何か知恵があれば伺いたい。

(事務局)

受託事業者へのアプローチも当然必要で、共通の理念が重要というところで、今年度受託事業者を対象にした研修を実施した。受託事業者もわいわい広場を統括し、わいわい先生をサポートしている状況だが、今のシステムでは、次世代を引っ張ってもらうような、遊び場のコーディネートをして頂けるような方が豊富に育っていくことは難しいと危惧している。

(委員)

具体的に言うとサポートチームに参加するわいわい先生への報酬の予算をつけられるということなのか。特別な手当を市から出すといったそういうところまで踏み込めるのかどうか伺いたい。

(事務局)

サポートするチームを具体化していく過程で整理していく必要があるが、活動に対する手当まで含めて考えていかなければならないと思っている。

(委員長)

これまで人材育成に関わってきて、全体的な研修の中で共通理念を確認していくことは継続していかなければならないが、現場でそれを共有していくことがとても大事だと思った。

現場感を持った方がサポートチームに参加することで、わいわい先生も安心してわいわい広場の運営に取り組めるのではないだろうか。確かに予算面など慎重に検討しなければならない部分もある。受託事業者の役割を奪ってしまう形ではなく、いい形で連携できるようにしないといけないという難しさもあるが、私は質が落ちていく怖さを感じている。わいわい先生も入れ替わってくる。もちろん、受託事業者の担当者やコーディネーターも入れ替わる。その中で今でも共有しながらやってきているが、このままでいいのかという不安もあり、共通のチームで理念が共有できれば全体として更に支えていけるのではないだろうか。

(委員)

私が今、地域型のわいわい広場の運営を行うにあたり現状ぶつかっている課題であり、いつも、思いつつここまで具体的に話し合うことはなかった。

(委員長)

受託事業者では各わいわい広場間で共有できる部分が、地域型の現場などは全体では共有できないといった大変さがあり、そういう意味ではサポートチームは受託事業者や地域型の垣根を越えてこれからの現場がより質が高くなっていくような支援ができる考え方ではないかと思う。チームに限らずこういうやり方があるのではないかという意見があればご提案頂けると今後の参考になる。情報が入ってこないということが大きいのか、それとも現場にもっといろんな人が来てほしいのか、どういうサポートが必要なのか。

(委員)

巡回に来てもらい、現場を見て助言をもらおうとほっとする。上から意見を言われるように捉えるのか、それとも水平的に意見を出せるように捉えるのかで少し違うように思う。

(委員長)

安心感があるというのはかなり大きいと思う。受託事業者によってそれぞれ工夫はされているだろうが、評価される感覚というのはもしかするとわいわい先生の方にはあるかもしれない。困り感などを現場で言えるのかということが鍵にはなるのではないかと思う。理念がごちゃごちゃになった状態から立ち直そうとするのは遅いと思っており、先読みしながら支援していけば良いと思っている。

(委員)

サポートチームを作って支援していくという考えは良い考えだと思っている。実行性もあり、生の声を聞きながら研修という場を持たずに支援していけるようなシステムなのではないかと思う。私が思うことは、実際わいわい先生は何を支援してほしいのかというニーズを捉えることが大事だと。例えば遊びの企画、構成力というところなのか、それとも実際に子どもを動かすことなのか、様々な学校との連携、留守家庭子ども会との連携、何がニーズなのかしっかり捉えた上でないと支援のポイントがずれてきてしまうのではないだろうか。システム作りとニーズ把握というのは非常に大事なところではないかと思う。

(委員長)

わいわい先生の声聴きながらやっていくことが大事。これまでも取り組んだ経緯がある。

(事務局)

わいわい広場の充実に向けて、昨年、市の担当者とコーディネーター、推進委員、受託事業者と一緒に現場を巡回して、各広場の現状や課題を共有してサポートする仕組みを作ったが、コロナ禍でこの仕組みがうまく動いていない状況ではある。

(委員長)

現場の声を聞きながら動く体制がありつつも、コーディネーターや推進委員だけで回していくことはなかなか難しいと考えたとき、せつかく作るのであれば実働性がないともったいないと思う。あとはわいわい先生のニーズ把握という点では、受託事業者がわいわい先生一人一人に面談をして今後の方針を立てていると思うが、評価に関わる中で本音を出しづらいことがあるのではないかと思う。そうであれば元わいわい先生など、現場を分かっている方や、別の視点から見た、例えば特別な配慮が必要な子どもたちの対応に特化し

た方などが入ると支援の幅が広がるのではないだろうか。

(委員)

いくつもの良い提案を頂き本当にその通りだと実感している。受託事業者の人材の入れ替わりもあり、わいわい広場の現場のニーズを的確に捉えられなかったり、気持ちは一生懸命しようと思ってもその気持ちが届きづらかったりすることが出てきてしまっているのではないか。

わいわい広場という子どもの遊び場に関わるということは、まず子どもを受け入れること。補助員さんや見守りサポーターの人たちに、わいわい広場ではこういう視点で子どもたちの遊び場を育てていこうという趣旨を伝えている。ただ、実施校によって差があり、きちんとそれを伝えきれぬわいわい先生もいれば、なかなかうまく伝えきれぬわいわい先生もいる。地域性もあり、わいわい先生歴1年目というところもあれば、わいわい先生歴15年というところもあるわけで、経験に差がある。そんな中で、5年、10年とわいわい先生として勤めていた方が離れるのはとてももったいない。培ってきた経験や知識があり、ニーズが何なのか、何が必要なのかわかっており、そういう方たちがチームの担い手になることは非常に価値のあることではないか。一方チームはバランスが大事で、青少年育成コーディネーターにはこれまでも学校や地域との関係性を育ててもらっており、青少年育成コーディネーターの役割もわいわい先生には必要。

特性のある子ども達もこれから増えてくるだろう中で、多様な子どもたちに対応できるようなチームを作っていくことを始めていかないといけない。チームを1から作るにはだいたい3~5年かかると思っており、試行錯誤しながらでもスタートしていくことが大切なのではないだろうか。

(委員長)

確かに経験年数が長い方が離れてしまうのはもったいないと思う。だが経験豊富な方ばかりで固まり、上から言ってしまうようになると意味がないとも思うので、バランスが大事だと感じさせられた。わいわい広場のことに関連して、こういう方が入ってもいいのではないかという意見もあると思うが、わいわい広場に限らず皆さんがそれぞれ関わっている中で、こういうチームがあると良い、こういう工夫があるとやりやすかったなどそういう意見もあると参考になるかと思う。

(委員)

例えばチームを作るにあたり、受託事業者を通さず個人的にそのような意向がありチャレンジしてみようと思う方に手を挙げてもらうといった、個人的にチーム作りに参加できる仕組みはどうだろうか。

(委員)

自分が携わっている施設でも、職員の質をどう上げていくかを考えている。ノウハウを持ったベテランの方が退職する時期に差し掛かっていて危機感を持っており、どうすれば支援体制を作れるかと考えていたが、思えば思うほどその方の雇用の体制はどうなっていくのか、そこを具体的なところまで詰めないと、実現できないと思ってしまう。例えばわいわい広場のサポートチームに入る人は、福岡市として雇用するという形をとるのか、それとも受託事業者に許可を取って、プラスアルファの賃金を払いやってもらうのか。雇用の仕組みの問題と活動してもらう話がどういう関係で進めていけばうまくいくのか気になっている。何か良い知恵を貰えたらと思っている。

(事務局)

対応案の1つとして、雇用という形ではなく、活動に対して謝礼金を支払うという形が考えられる。

謝礼的な部分だけではなくて、チームに入る方たちが負担になりすぎず、やる気や興味関心を持って、その方たちのスキルアップにも繋がり、今後のわいわい広場を引っ張っていけるような仕組みづくりが必要になってくるのではないだろうか。具体的な部分については今からだと思う。

(委員)

巡回することによって自分も情報が入ってきて、子どもたち自身が育つ喜びというのも出てくるので、人によってはやってみたいと思ったり、やればやるほど面白みを感じたりと負担的な部分だけではないのではないのか。それは市としても願う部分でもあり、うまく金銭的な部分と何がそこで得られるのかという部分を考えながら良い方向でやっていけたらと思う。

(委員)

わいわい先生が何か困ったことがあれば受託事業者に相談すると思うが、複数受託事業者が入っている状況で、どの程度事業者抜きでわいわい先生の横の繋がりはあるのか。

(事務局)

基本的には同一事業者の中での横の繋がりが強く、当然会議とかもあるだろう。なかなか異なる受託事業者での横の繋がりは少ないのではないのか。

(委員)

コロナ禍で対面研修が減っているが、それまではわいわい先生研修をするときに、全体のわいわい先生が交わっているような課題について学び合うことをしてきた。コロナ禍でな

ければ、例えばコーディネーターが担当区のわいわい先生に声を掛け、事業者の垣根なく区ごとに集まって交流会を開催し、親睦を深めようとしたこともある。

最近では熱中症指数や、ゲリラ豪雨などでわいわい広場を開催するかどうかわくとき、受託事業者内ではなく、近隣校に状況を確認し、それがきっかけでいろんな相談をするようになることはあるようだ。ただ情報共有できず孤立しているところもあると思う。

(委員)

今日のわいわい広場の開催をどうするのか、明日の開催をどうするのか、今後コロナをどうしていくのかということをおせる機会が、市全体というとき大きすぎるので、区や地区といったブロックごとにあれば、わいわい先生も不安になることは減るのではないかと、関わっている中では感じていた。サポートチームなどが巡回をすると、事業者の枠を超えた情報共有がもっとしやすくなるのではないかと。

現場ごとに困っていることは本当に多様だと思う。事業者を通して取り上げるとなかなか話せないところもあると思うので、わいわい先生からネットなどを活用したアンケートでも何でもいいので実際何に困っているのか取り上げるという機会があれば、私たちが想定していない困りごとなどがわかっているのではないかと。

(委員)

補足すると、市で実地研修を行っており、受託事業者関係なく、わいわい先生が他校の現場を訪問できる機会がある。行ってみたい実施校にわいわい先生が行き、現場を見て様々な良いところを学ぶ。もう一点、ネットの利用は、わいわい先生の平均年齢が割と高く、そういうことに精通しづらい方が多いことも課題としてある。

(委員)

PTAでも各PTAが困っていることを定期的に取り上げることを行っている。ネットを活用しており、私たちの年代でも、そういうITを使いながらやっていくことは可能だとは思う。紙が良い方と、ネットが良い方がおり、ネットにできなかった方や、紙にしていると時間がかかるのでできない方がいる場合は、どちらも並行して実施してみたらいいと思う。

(委員長)

わいわい先生のお声をできるだけ聞くというのは大事なことだと思う。そのお声に対して努力を惜しまないことは本当に大切。これまでわいわい先生のお声を聞くとき、受託事業者を通して行われたのがネックだったのではないかと。受託事業者が悪いということではなく、わいわい先生が気を使いながら意見していた部分があるのではないかと。受託事業者の垣根を越えるためにネットを活用することで、わいわい先生のお声が聞きやすくなるかもしれない。

い。一方で受託事業者の垣根を超えることは、受託事業者にとって、自分たちのノウハウが流出してしまうというデメリットにも感じられるような気がしており、そこは慎重に考えなければならない部分かもしれない。しかし、人材が辞めていくことは事業者にとってもマイナスなことであり、モチベーションが高まり、わいわい先生が増えるなど、全体的に良くなることは受託事業者にとってもプラスなのではないか。

現在も、わいわい先生が実地研修で違う現場に行ったり、プレイヤーがいろんな現場に入り情報を繋いでくれている役割もあったりするので、それが単独ではなくチームとして活動できればいいのではないか。細かな運営については受託事業者がサポートし、学校との連携や地域の方々との関わりはコーディネーターを中心に対応してもらおう。わいわい広場はどういう理念なのか、どういう遊び場を作っていくのかというのは、現場感のある方や子どもに関わりのある方が携わることで全体として高まっていくのではないか。

(委員)

わいわい広場は、子どもを育成する事業であると同時にたくさん地域の方など多様な人に関わってもらっており、地域と福岡市の土壌を耕す取り組みだと思う。難しい課題に取り組む中で、それを総括していくのが福岡市の担当課になる。長期的にやっていくために、何年かごとに市の担当者が変わってもビジョンを継続していけるように推進委員会が発足したが、総括し、長期的な関りをするためにしっかり携われる担当者がいて欲しい。そのために、推進委員会に加えて今後の体制づくりを検討してもらいたい。

(委員長)

どうやってわいわい広場を持続していくのか、という話で今日はサポートチームをという話が出てきた。場をつくる、組織をつくるということは難しいと思うが、大事にしたい理念を確認し原点に戻れるものは必要。今回作成したハンドブックはその役割を果たすものだと思うが、組織としてより確固たるものになっていくといいと思う。

(事務局)

本日いただいた貴重なご意見をふまえ、持続可能なわいわい広場の運営を目指して取り組んでいきたいと思う。